

症例6 浮気

- ・ F氏 75才. 女性
- ・ 既往症:軽度の腎不全

主症状

症状〔1〕群 2年前から物忘れが目立つ。

自宅の部屋は乱雑で不潔。

症状〔2〕群 夫に対して攻撃的で冷たい態度をとる。夫婦げんかが頻発。

「夫は猫と仲良くなり、間に生まれた子供2人と一緒に暮らしている」と言う。

「病院の医者がいやらしいことをするから」と受診を拒否する。

誰も部屋に入れないので家族が困っている。

生活歴

夫は年下の74歳。子供が2人。5年程前まで、夫は衣類などを車に積んで行商。遠くに出かけたときには、2～3日家を空けることもあった。田畑もあったので、食べるのに困ることはなかった。畑仕事は主にFがしていた。Fは腎臓の機能低下を指摘され、10年前から通院による治療を継続している。

【メモ-1】

かつてはFの家は、近所の人たちが衣類を買いに来て賑やかだった。そのような時、夫は気の合う人たちと酒を酌み交わすのが常であった。そうした飲み仲間のなかには、「洋服を買う客の中には美人の後家がいったりして、もてているだろう」などと、夫を冷やかす人もいた。もとより酒席でのたわいない冗談であったが、Fには心に引っかかるものがあつたようである。畑の中で泥にまみれた野良着姿の自分とは対照的に、きちんと服装を整えて出かけていく夫の姿に、自分以外の女性の存在を想像したりすることもあつたようである。

しかし、Fは根拠もない想像で、はしたなく夫を問い詰めることはしなかった。我慢していた。しかし、夫とこのことを話し合い、事実を確認し、納得しておかなくてはいけなかったのである。我慢してはいても、持ち続けている疑いは、やがては年をとった時、Fの頭の中に妄想と嫉妬を生み出すことになったからである。

【メモ-2】

Fは認知症が進んだとき、「夫は猫と仲良くなっている。間に生まれた子供2人と一緒に暮らしている」と怒り、騒ぐようになった。憎しみは幻の女性を、自分が嫌いな猫に置き換えて、夫を侮辱した。猫との間に生まれた子供の数が2人というのは、Fが生んだ子供の数と同じで、夫の浮気を信じて疑わないことを意味している。

さらにFは、自分の夫のように、男は皆いやらしいことをする動物だと考えた。したがって、病院の医者もいやらしいことをする存在となった。

【メモ-3】

Fは、自分の生命を脅かす腎臓疾患の不安と、夫の女性問題とに、長い間悩まされながら高齢期を迎えた。この2つの問題が、本来より時期を早めて認知症に陥らせてしまったと考えられる。

入院してから、しばらくの間、他の女性患者に「あなたは私の夫と浮気をしたでしょう」と詰問して回っていた。

経過は良好・退院となった。

【まとめ】

自分の『存在価値』を否定されているような、不安な気持ちで長期間生活していると、高齢期に認知症に陥りやすい。

妻の『存在価値』を否定し、妻の幸福感を破壊する最たるものは、『夫の浮気』であろう。

母の『自己実現』を否定し、生きる意欲を喪失させるものは『親を敬う子供の心を失った親不孝な子供』であろう。